

てらやつはいじあと  
寺谷廃寺跡(埼玉県比企郡滑川町)

<http://blogs.yahoo.co.jp/titibu212000/31305107.html>

『武蔵最古の寺は現在わかっている限り、埼玉県比企地方の滑川町にあった寺谷廃寺です。この寺は既になくなっており、正式な寺名も伝わらない寺ですが、遺跡から出土した瓦が大和の飛鳥時代の寺と似ており、そのため創建は7世紀前半か中頃とされています。そして、同じ比企地方の寄居町には馬騎の内廃寺があり、これは7世紀中頃の創建とされています。これらの寺は法隆寺などにわずかに遅れるだけで、ほぼ同時期の創建と考えてもよい寺です。武蔵には少なくとも18の古代寺院がありました。

武蔵の寺の多くは、こういう中央政府の仏教普及政策によるもので、その多くは豪族の氏寺でした。それまでは古墳築造で力を誇示していた豪族たちは、新しい時代の波に乗って、今度は寺院造営に力を注いだのです。東京でもっとも古い寺は浅草寺とされています。ここからは平安時代初期の瓦が出土しています。しかし、奈良時代に遡る寺院跡は府中の京所でしか見つかりません。ですから、奈良時代には現在の東京東部には寺院を建てるような豪族はいなかったようです。これら古代寺院は豪族が建てた寺院ですが、こういう寺院の造営は中央政府の支援がなければできなかつたと思います。というのも、寺をつくるというのは、想像以上に大変な資力と政治力を必要とするからです。地方の寺はこれら都の大寺院から派遣された僧や技術者の手で造営されました。そのため、武蔵の古代寺院の建物の配置や出土する瓦は奈良の口大寺院とほぼ同じになりました。たぶん、都の大寺院に所属する技術者が瓦型を持って遠く武蔵国までやってきたのだと思います。

当時の僧は中国語の教典を中国語で読むこととなります。そういう僧は地方にはいませんから、結局は都の大寺院から派遣してもらう必要がありました。

古代寺院の特徴は規模が大きいことです。規模が大きいだけに一度焼失すると再建がむつかしく、古代寺院の多くはその後消滅してしまいました。□

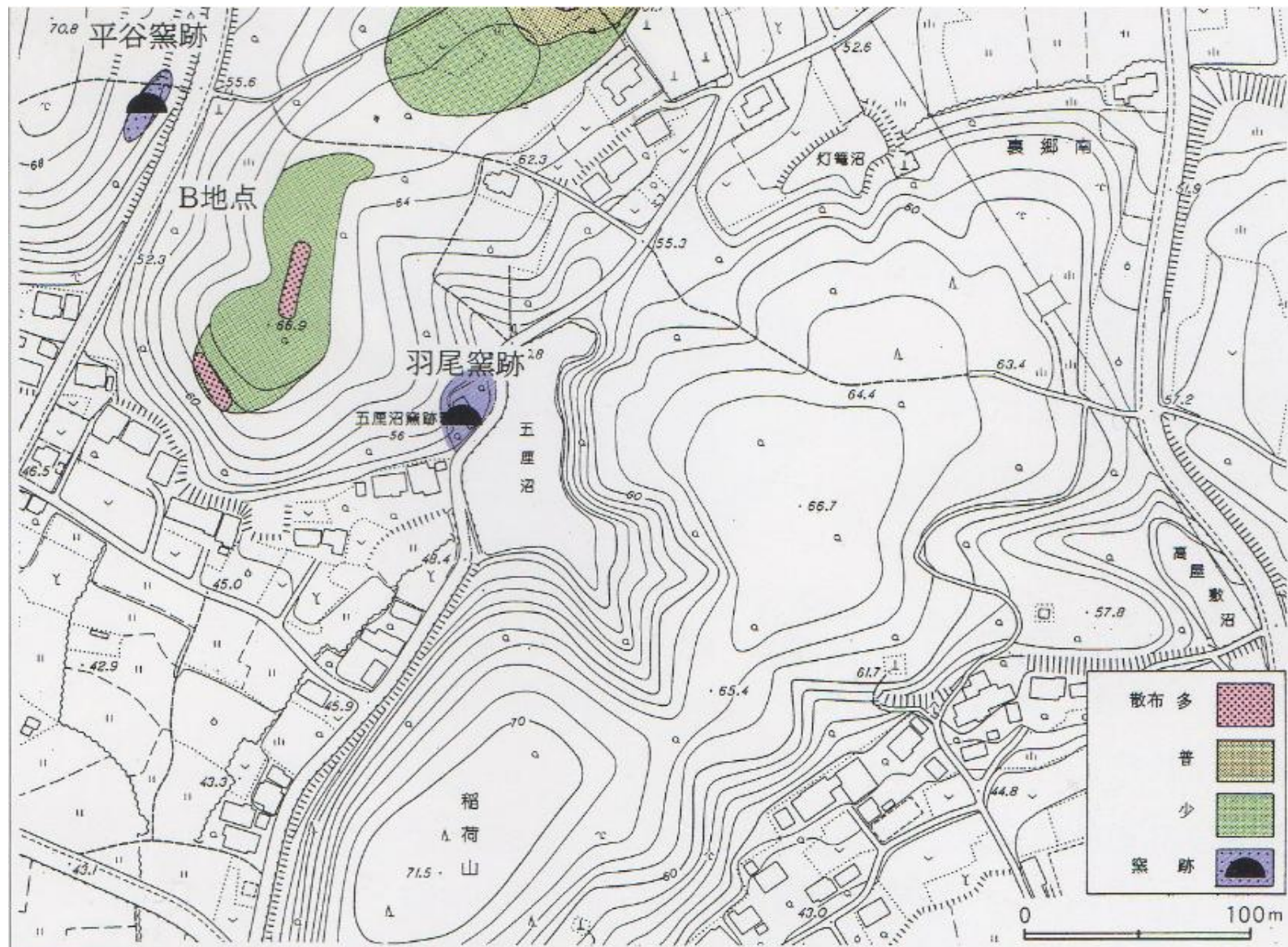
武蔵の古代寺院と窯跡群があった所を見ると次の二つのことが言えます。

ここはちょうど鎌倉街道上道の道筋にあたるのがわかります。それと、高麗郡に寺院が多いことです。

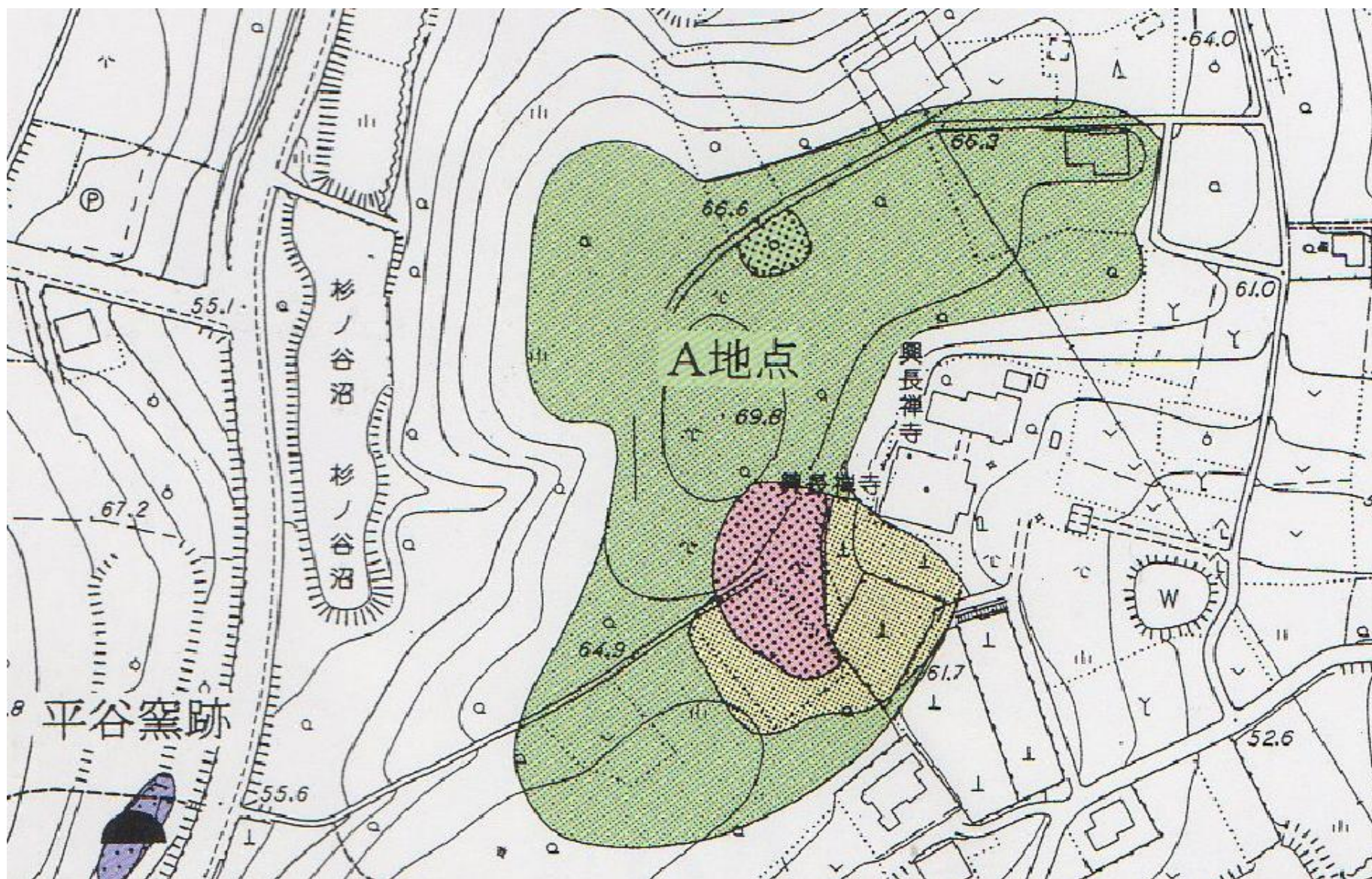
全国的にも古代寺院は渡来人たちによって造営されたものが多かったかもしれないという印象を持っています。』







特別展「埼玉の古代寺院」より



寺院跡は、標高約65mの丘陵部に位置する。昔から、A地点で古瓦が出土することが知られていた。すぐ近くに平谷窯跡・羽尾窯跡があり、須恵器生産の基盤を背景として瓦生産が行われるようになったと考えられている。

未調査のため詳細は不明だが、出土した軒丸瓦から東日本最古の寺院跡と考えられている。

採集された瓦は約700点以上にのぼるが、なかでも軒丸瓦は飛鳥寺の瓦との類似性が指摘されており、飛鳥から遠く離れた地で、7世紀前半に寺院が存在していたことを示す資料として貴重である。

周辺では6世紀後半以降に小規模古墳群が多くなり、7世紀になると羽尾窯跡・平谷窯跡が相次いでつくられるなど、寺院が造営される基盤が急速に整えられていった様子が見えてくる。

寺院造営者としては、渡来系氏族壬生吉志氏、聖徳太子の舎人物部兄麻呂とする説がある。

現在の興長禅寺



本堂







この木々の裏がA地点





平谷窯跡からA地点方向へ登る













A地点(ピンクの部分)







調査が行なわれた跡がある









右手方向に興長禅寺が見える





興長禅寺の後方がA地点



興長禅寺上方右手からアプローチする





A地点







右手が羽尾窯跡、左は五厘沼







羽尾窯跡











平谷窯跡











(インターネットより借用)

### 坂東最古の寺谷廃寺

天平十年(738) 聖武天皇によって国分寺・尼寺創建の詔が出され、諸国に創建された。それ以前、各国に寺院がなかったわけではない。飛鳥の官寺も始めは氏寺として創建されたように、坂東各地にも既に私立の氏寺が建てられていた。

その中で最古とされるものが武蔵国比企郡(埼玉県比企郡滑川町羽尾)の寺谷廃寺である。発掘された軒丸瓦の破片は、舒明十三年(641)に建立された飛鳥の山田寺のものと同一形であったことから、七世紀前半に造営されたものと推定されている。

(下記インターネットより借用)

<http://www.ne.jp/asahi/hon/bando-1000/band/ban-201.htm>